



来日直後オリエンテーション (四月期)実施報告

(財)自治体国際化協会業務部

四月九日(木)・一〇日(金)の二日間の日程で、東京のルポール麹町(麹町会館)において、新規JETプログラム招致者を対象にした平成二二年度四月期来日直後オリエンテーションを開催いたしました。

今年度の四月期のオリエンテーションは、日本と学校の卒業時期が同じである中国、韓国及びブラジルの三方国を対象としており、研修前日の四月八日(水)に中国から五人、韓国から一人、ブラジルから三人の合計三方国七三人が参加しました。

飛行機はほぼ定刻に到着し、新規招致者



↑当協会 香山理事長による歓迎の挨拶

の皆さんは、これから始まる日本での生活に多くの期待をふくらませながら、たくさん荷物を持って日本に降り立ちました。特にブラジルからの新規招致者は二四時間以上かけての長旅にもかかわらず、明るく元気に挨拶をしていました。

オリエンテーション会場となるホテルでは、今回の研修会の運営協力者(以下、TOA)である福岡市国際課国際交流員(以下、CIR)の唐璐璐(トウ・ルル)さん、長崎県国際課CIRの柳ジン(ユ・ジン)さん、山梨県国際交流課CIRの田中エリカさんが新規招致者の皆さんを出迎えてくださいました。

初日の九日には、まず開会式及びJETプログラムの説明がありました。その後、日本での生活について先に紹介したTOA三名と日本人担当者の皆さんにご協力いただき、パネルディスカッションを開催いたしました。日本人担当者は、岐阜県国際課の渡邊



↑パネルディスカッション

卓弘さん、長野県国際課の井上智さん、福岡市国際課の樋口隆夫さんの三名にお願いしました。現役のJET参加者であるTOA

平成21年度 来日直後オリエンテーション (4月期日程)

日時	時間	日程	
2009年 4月8日(水)		新規招致者来日 チェックイン会場：エメラルド 3F (中国、ブラジル)、アメジスト 3F (韓国)	
	10:00 10:15	開会式 会場：ロイヤルクリスタル 2F	
4月9日(木)	10:15 10:40	JETプログラムの基礎知識、契約等	
	10:40 12:00	パネルディスカッション：「日本での生活について」 会場：ロイヤルクリスタル 2F パネリスト： 渡邊 卓弘 (岐阜県・日本人担当者) 井上 智 (長野県・日本人担当者) 樋口 隆夫 (福岡市・日本人担当者) 唐 璐璐 (福岡市・中国 TOA) 柳 ジン (長崎県・韓国 TOA) 田中エリカ (山梨県・ブラジル TOA)	
	12:00 12:45	昼食 会場：エメラルド 3F	
		国際交流員 (CIR)	
		外国語指導助手 (ALT)	
	12:50 13:50	「職場別ミーティング」 会場：ルビー (県・政令指定都市) 2F サファイア (市) 2F アクアマリン (町・村) 3F 講師：運営協力者 (TOA)	12:50 13:20 「行政説明」 講師：伊藤 文昭 (文部科学省) 会場：アメジスト 3F
	14:00 15:20	「グループロールプレイ」 (CIRになってみましょう！) 会場：ロイヤルクリスタル 2F	13:30 15:20 ・「日本における中国語・韓国語教育の現状について」 ・「先輩ALTからの体験談・指導助言」 中国語指導助言：豊 旭 (先輩ALT) 韓国語指導助言：金 玟弟 (先輩ALT) 会場：アメジスト 3F
15:30 16:10	CIR・ALT合同分科会「国別ミーティング」 会場：ロイヤルクリスタル (中国) 2F・アメジスト (韓国) 3F・アクアマリン (ブラジル) 3F		
16:15 17:00	取りまとめ団体別ミーティング 会場：ロイヤルクリスタル 2F 真珠 4F		
18:00 19:30	夕食会 会場：ロイヤルクリスタル 2F		
4月10日(金)		国内移動 (各取りまとめ団体へ)	

三名やJETと共に仕事をしている日本人担当者の経験談を交えながら、JET参加者の職務内容のみならず、来日後にすべき

手続きや注意点、職務を遂行する際に必要な準備や姿勢など、多岐にわたった意見交換を行いました。時には笑いもあり和やか

な雰囲気の中、これからの自分の生活や仕事と直結する内容であるため、新規招致者の皆さんは真剣に耳を傾けていました。その後昼食を挟んで、午後からは外国語指導助手(以下、ALT)とCIRの各種に分かれ、ALTは文部科学省主催、CIRは当協会主催で研修会を行いました。このうち、当協会主催で行ったCIRの研修会を紹介いたします。

まず、午後の最初は「職場別ミーティング」を行いました。同じCIRといっても、配置先によって仕事の内容や雰囲気が大きく異なります。そのため、新規招致者の皆



↑ 職場別ミーティング



↑グループロールプレイ

さんがこれから勤務する都道府県庁（政令指定都市含む）、市役所、町村役場の三つのグループに分かれて、TOA三名や協会のプログラムコーディネーター（以下、PC）からそれぞれの実体験などをふまえながら具体的に職務内容などについて説明がなされました。配置先に応じた留意事項やアドバイスの他に、翻訳や通訳にあたっての注意事項や学校訪問に役立つレクリエーションなど、今後の業務の遂行に役立つ内容で、新規招致者の皆さんは自分の配置先や仕事についてのイメージをつかむことができましたようです。

職場別ミーティングの後は、「グループプロ



↑取りまとめ団体別ミーティング

ールプレイ」を行いました。八つのグループに分かれ、TOAの三名と協会PCが各グループのリーダーとなり、公民館でのカルチャースクールや小学校での授業という状況を設定して、実際にCIRとしてよく求められる自国文化の紹介などを一人ずつ順番に行い、その内容をグループで検討しました。新規招致者の皆さんは、日本語でプレゼンテーションをするということもあり、初めは緊張している様子でしたが、時間とともに少しずつ慣れてきて、短時間で簡潔に自国の食文化、童話やスポーツなどについてユーモアを交えながら紹介していました。

グループロールプレイの後は、ALTとC

IRが合同で出身国ごとに集まり、その国の言語で研修する「国別ミーティング」を行いました。それぞれ、TOAの三名が職場での留意事項や日本での生活全般についてのアドバイスや情報を提供してくださいました。来日後しばらく日本語での研修が続いていましたが、この研修では母国語で話ができることもあり、新規招致者の皆さんはのびのびとした雰囲気なか、多くの質問をするなどして、積極的に研修に参加していました。

国別ミーティング終了後、新規招致者の配置先となる各取りまとめ団体（各都道府県及び政令指定都市）担当者とのミーティングを行いました。これからの赴任先ということもあつて、熱心に各配置先についての概要説明を受け、出発に際しての留意事項等について打合せをしていました。

研修等はこれで終了し、夕方からは新規招致者の皆さん、各取りまとめ団体の担当者、総務省、外務省及び文部科学省の関係者を招いての夕食会が行われました。来日した翌日で、終日研修があつたにもかかわらず、新規招致者の皆さんは元気な様子で他の出席者との会話を楽しんでいました。

翌一日には、新規招致者の皆さんはそれぞれの赴任先へと旅立っていきました。当協会といたしましては、新規招致者の皆さんが一日でも早く日本での生活に慣れて、充実したJETとしての活動が送れるように心より願っております。

花よりも小さく



群馬県みどり市教育委員会外国語指導助手
Icy Jones アイシー・ジョーンズ

私は群馬県の小さな町で小学生と中学生に英語を教えています。

語学指導等を行う外国青年招致事業（JET）のメンバーの一人としてペンシルベニア州フィラデルフィアから日本へやって来ました。私は群馬県に着いて間もなく、富弘美術館を訪れました。星野富弘さんは元中学の体育教師で、授業中の事故で首から下が不自由になった画家であり詩人なのです。彼は心で詩を詠み、口で描くことによって花の絵と詩を創り出します。彼の作品の一つに私の心を大変惹き付けるものがありました。それは「花よりも小さく」というものです。私には奇妙な目標のように思えました。というのも私の出身地はアメリカ、大きければ大きいほど良いという考えの国だからです。花よりも小さくなるためにいったい誰が努力するのだろうか？と理解出来ませんでした。しかし、四年の海外生活は私の物事の捉え方を変えたのです。

私の日本での生活は新しい経験とチャレンジでいっぱいです。それらの経験は自信が増したから出来たわけではありません。エゴを抑え付けたから出来たのです。私はずっと自我の強い人間でした。エゴの強かった私は新しいことに挑戦する余裕がなく頭でっかちでした。もし何か新しいことをして失敗してしまったら自分にダメージを受けるでしょう。そんな私は自分のよく知っていることや、自分が得意なこと以外のものから距離をおいていました。しかし、

失敗することや見た目がおかしいことを気にさえしなければ何にでも挑戦出来る自由な気分になりました。

都会育ちの私が花を見ること、植物を育てること、ハイキングをすることの楽しさを知りました。高い所は苦手でしたが、スカイダイビング、バンジージャンプ、パラセーリングが大好きになりました。ペットを一度も飼ったことがなかった私が虎を撫で、ライオンに餌をやり、象の背中に乗り、さらにはイルカと一緒に泳ぎました。寒いのは嫌いでしたがスキーやスノーボードを学びました。泳げませんでした。スキューバダイビングを学びました。日本に来るまでは日本人には、ただの一人にすら会ったこともなかったのに、今は友達や家族と呼べる日本人がたくさんいることを誇りに思います。

学校で同僚や生徒のグループの一員になるためには謙虚にならなければなりません。初めは先生や生徒と一緒に何かすることに気が進みませんでした。授業が始まるとすぐに私は三〇〇名の生徒の注目の的になりました。生徒全員の目が私の二つの動きを細かくモニタリングしてるかのように見ていました。その視線は私を自意識過剰にし、密かにちょっと有名になった気分



↑大間々東中学校で体育祭練習前



↑生徒たちと体育祭練習ポーズ

られた自分だけの世界に入り仕事をします。日本ではそのようなプライバシーはありません。私と同僚の間にあったのは言葉の壁というバリアー

を楽しんでいました。でも自分は特別なだと思ひ込むことで毎日の小さなことを見失ってしまいます。私は目上の存在として話すことを止め、生徒たちと同じ目線で話すようにしました。そして私は気付いたのです。私が生徒たちに教えることよりも、私が生徒たちに学ぶことの方が多いのです。生徒たちは折り紙から今流行のポップカルチャーまで教えてくれました。私の三〇〇名の生徒は三〇〇名の先生となり、それぞれのレッスンはどれもユニークで重要です。授業中、生徒たちは以前と変わらず私を感じ心の眼差しで見つめています。そして今は私も同じように生徒たちを見るのです。

世界は自分を中心に回っているんじゃない、と思うようになってから同僚の先生たちも違って見えるようになりました。先生たち全員が同じ部屋で仕事をすると知った時はとても驚きました。自分専用の広いオフィスに慣れていた私は自分の左右に同僚が座っているのはとても落ち着かないものでした。アメリカでは一致団結で働かなければならない状況でもプライバシーは尊重されています。パーテーションを使い仕切

だけだったのです。しかしジェスチャーや辞書を利用し笑顔でいることがその壁をゆっくりと取り払っていききました。

仕切りのない日本スタイルの座席はだんだんと楽しくなり居心地良くさえなりました。同僚と親しくなることで連帯感、チームワークが育ちました。気が付くと私は同僚と私生活について話すことが楽しみになっていたのです。同僚の先生とその家族と共に時間を過ごし、結婚式に出席し、一緒に飲んだり歌ったりしました。彼らはすでに私を我が子のように受け入れてくれて今では家族のような絆を感じています。実際に同僚の一人を敬愛の意を込めてお父さんと呼んでいます。私は近くアメリカに帰るでしょう。悲しく感じるのは職場を去るからではなく自分の故郷を離れなければならぬと感じるからです。でも自分は自分の存在よりも、もっと大きな何かの一部であるという事実が悲しさを癒し元気づけてくれるでしょう。

以前私は、謙虚であることは避けるべきことであるかのように話をしていました。しかし日本人はお互いに尊敬のサインとしてお辞儀をすることで進んで謙虚さを示します。今では謙虚であることは初めだけでなく最後まで、ゴールまで必要だと思いうようになったのです。私は来日して以来、幾



↑群馬県の花火大会

度となくお辞儀をしてきました。おそらくどのお辞儀もゴールまでの小さなステップの一つだと思えます。

JETプログラムとは英語を教える以上に、生徒たちに今までとは違う角度で世界を見るように勧めることでもあるのです。私たちは身近でお互いの強みや弱点を見ることが出来ます。それぞれ違う国の人たちだってみんな同じ、単なる人間だということに気付くことが出来ます。崇拜されるべき偶像でも恐れられるべき巨人でもないのです。最近、再び富弘美術館を訪れました。私は同じ絵画を見つけようやく意味がわかったのです。花よりも小さくの意味が。私は花より小さくなることでとても成長していたのです。



Icy Jones

アメリカ・ペンシルベニア州フィラデルフィア出身。前職は薬物依存症のカウンセラーとしてジョーンズ・ホプキンス大学病院に勤務。JETプログラムに参加し現在群馬県みどり市の中学校でALTとして活動4年目。趣味は旅行。夢は六大陸制覇。

故郷への旅



大阪府立久米田高等学校外国語指導助手
Omara Turner オマラ・ターナー

私の運命は二〇〇七年に変わりました。今では、それはラッキーだったと思っています。ジャマイカの様々な地方から選ばれた、活発でアイデアに満ちあふれた一四人の一人に選ばれたのです。私たちは一八時間のフライトの末、最低一年間は正反対の文化の中に身を置くことになりました。JETプログラムに参加することを許され、大変ワクワクするとともに、これから私が担う役割に対して心の準備をしなければなりませんでした。豊かな木々と水の島、ジャマイカを離れ、自分の生活が実際どんなものになるのか、考える余裕などありませんでした。東京の立派なホテル、京王プラザでのオリエンテーションの最終日の夜になって初めて、自分がとてもいい第一歩を踏み出したことを悟りました。

ルームメイトはぐっすりと眠っていました。私が思うに、自分の故郷から何千キロも離れたところで暮らすという覚悟が、彼女にはできていたのかも知れません。ベッドの中で寝返りばかりして、私の心臓は激しく鼓動していました。今までこんなに遠くに、また二カ月以上家族から離れたことなどなかったのです。『体調が悪くて誰か看病してくれるの。』『仕事から帰って誰かお帰りと書いてくれるの。』『そこに誰がいるの。』『誰がいてくれるの?』その夜は余りの不安にほとんど眠れませんでした。そして



↑日本にいるジャマイカの友達

うとこの時がやって来ました。ジャマイカの仲間たちに別れを告げ、大阪の南部にある岸和田市へ一人旅立つ時が。

岸和田市に着き久米田駅の改札を出ると、その人は車で上司と私を待っていました。私たちを見るとニコニコしながら車を降りて、私の荷物に手を差し伸べ、名前を覚えてくれました。ジャマイカから遠く離れた不安でいっぱい、名前を聞いてもまだ覚えることができませんでした。何もかもが矢継ぎ早にすぎていきました。新しい職場の校長先生、教頭先生に紹介され、契約書に慣れない手つきで印鑑というものを押ししました。わずか一分間のことのように

した。そしてついに誰かがこう言いました。「小川さんという方が大家さんよ。」そこでやっと私の頭に『小川さん』という名前が刻み込まれました。私の荷物は小川さんの車に乗せられ、私の新しい住み家へと運ばれました。故郷から遠く離れた私の家に。

夏の予定はすでに小川さんが立ててくれていて、学校にも承認され、あとは私が確認するだけになっていました。日本で初めての週末、小川さんがパーティーを開いてくださり、ご主人や二人のお子さん、その家族に紹介されました。このパーティーでは正座の仕方を知り、初めて日本の家庭料理を口にしました。日本の習慣と文化を知ると同時に、小川さんの家族の一員になりつつあるような気がしてきました。パーティー



↑小川さんと夕食

ィーの終わりに、徳島へ一緒に家族旅行をすることを知らされました。そこでは小川さんの親戚を紹介してもらい、阿波踊りにも参加しました。

日本での初めての夏、家族でのいろんな行事を通して、小川さん一家との絆を深めて行きました。しかし季節が移り気温が下がると、私は病気がちになりました。冬の気候に私は震えあがり、ジャマイカに帰りたくありませんでした。ジャマイカでは二度を下回ることはありませんでしたから。しばしば私は体調を崩しましたが、看病してくれる人がいないという不安はありませんでした。小川さんがいつもそばにいてくれました。病気になる、いつも小川さんがお医者さんに車で連れて行ってくれました。(歩くところ分はかかる距離です)

体温を計ってくれたり、薬を飲ませてくれたり、食事の支度や布団をひいてくれることもありました。

病気の時も元気な時も、小川さんはいつもそばにいてくれます。単に隣に住む家主さんでなく、私の素敵な母親がわりなのです。仕事から帰っても小川さんはすぐ隣の家にいてくれる。話し相手が欲しい時も、すぐ隣に小川さんはいる…。彼女は本当に私の『おかあさん』なんです！

小川さんは今の私の生活に欠かせない存

在であり、日本での経験の大部分をしめています。JETプログラムに関わっていないければ、小川さんや彼女の家族に会うことはなかったでしょう。言葉の壁を越え、なじみのない国から来たジャマイカ人と深い絆を結んでくれました。まるで血のつながりがあるかのような気持ちにさせてくれました。クリスマス休暇にジャマイカに帰国した時には、涙を流して見送ってくれました。そして私の帰りを首を長くして待ってくれました。無事に帰って来てくれたと、空港で両手を広げにっこり笑って出迎えてくれました。紛れもなく小川さん一家のおかげで、私の日本での経験は豊かなものになっています。



Omara Turner

ジャマイカ出身。ウエスト・インディー大学（ジャマイカ）では専攻は英文学と政治学。来日前は英語教師として働く。趣味は旅行、読書、料理。JETプログラムでALTとして2年目を迎える。JETプログラムに参加し、大変充実した日々を過ごしている。

Smaller Than A Flower

I teach English to elementary and junior high school students in a small town in Gunma, Japan. I moved here from Philadelphia Pennsylvania to be a part of the Japan Exchange and Teaching Programme (JET). When I first arrived in Gunma, I visited the Tomihiro Museum. Tomohiro Hoshino was a local gymnastics teacher turned painter and poet after a horrific accident left him paralyzed. He creates touching floral paintings and poems by painting with his mouth and writing with his heart. I was particularly fascinated by one of his works of art. It simply read "Be smaller than a flower". That seemed like an odd goal to me. After all, I was from America, the land of bigger is better, and biggest is best. I couldn't understand why anyone would strive to be smaller than a flower. However, four years living abroad has a way of changing a person's perspective.

My life in Japan has been filled with new challenges and new experiences. Those experiences were not made possible by increasing my confidence. They were made possible by shrinking my ego. I had an overblown sense of self-importance. My big head left little room for new experiences. If I tried something new and failed, it would damage my self-image. So I rarely strayed far from what I did best or from what I knew well. Once I stopped

worrying about failing or looking foolish, I was free to try anything. A big city kid learned to appreciate flower viewing, planting, and hiking. A guy who was afraid of heights fell in love with skydiving, bungee jumping and parasailing. A man who never owned a pet, found himself petting tigers, feeding lions, riding on elephants, and swimming with dolphins. I hated cold weather, yet I learned to ski and snowboard. I couldn't swim yet I learned to scuba dive. I had never even met a Japanese person, yet now I'm proud to call many of them my friends and family.

To be part of a group I had to be willing to surrender a part of myself. Initially, I was reluctant to do that with my coworkers or my students. When I first started teaching I was the center of my 300 students' attention. All those watchful eyes were closely monitoring my every move. That attention only served to fuel my already inflated ego. I secretly revelled in my new found fame. However, the problem with thinking that you are larger than life is that you lose sight of the little things. So I stopped talking down to my students and I started talking with them. I realized that they had more to teach me than I had to teach them. They have taught me about everything from origami to pop culture. My 300 students have become my 300 teachers, each with a unique lesson to impart. When I am teaching,

My Journey Home

My luck changed in 2007, I am now lucky. I was selected to be among a group of fourteen vibrant and innovative individuals chosen from different parishes in Jamaica. As a group, we travelled eighteen hours to be immersed in a culture completely different from ours for at least one year. I was tremendously excited to participate in the Japan Exchange and Teaching (JET) Programme and I was so absorbed in the subsequent preparations for my new role that I had little time to think about what life would actually be like once I left Jamaica – the land of wood and water. It was not until the last night of the orientation at the grandiose Keio Plaza hotel in Tokyo that I became cognizant of the major step I had taken.

My roommate was sleeping soundly. Maybe she had already come to terms with the idea of being thousands of miles away from home, but my heart throbbed noisily and painfully as I tossed and turned in the bed reflecting. I had never been this far away from home or been away from my family for more than two months. Who will prepare dinner? Who will care for me when I get sick? Who will talk to me when I get home from work? Who will be there...? Who? Consumed with anxious thoughts I scarcely slept that night.

Then it was *time*, time to say goodbye to my fellow Jamaicans and time to be on *my* way to Kishiwada City in Southern Osaka.

Upon arriving in Kishiwada City, I exited the ticket gate at Kumeda station and there she was, waiting in her family car for my supervisor and I. When she saw us she alighted from the vehicle and immediately relieved me of my luggage and then told me her name, all the time wearing a beautiful, welcoming smile. No sooner had she introduced herself to me than I had forgotten her name due to my preoccupation with being so far away from home. Everything was happening so fast- one minute I was being introduced to my principal and vice principal and the next I was awkwardly stamping my seal on contracts. Then finally someone said, "Ogawa san is your landlady" at that point her name was rooted in my brain. My bags and suitcases were then placed into Ogawa san's car and off we went to my new house, my home away from home.

Little did I know that my summer schedule was drafted in advance by Ogawa san and approved by my base school, thus leaving the final approval to me. My first weekend ended with



Icy Jones

they all still stare at me with admiring eyes, but now I look up to them too.

By realizing that the world does not revolve around me, I came to see my coworkers differently as well. I was surprised to discover that Japanese teachers all sit together in the same room. Sitting with coworkers to the left and right of me was very uncomfortable at first. I was accustomed to my own office with lots of breathing room. In America, even those of us who are forced to work closely together have some degree of privacy. We work in our little cubicles and try our best to tune out the world around us. However, Japan offered no such seclusion or privacy. The only wall that existed between my Japanese coworkers and myself was the language barrier. However, they slowly began chipping away at that barrier using gestures, dictionaries, and smiles.

The open sitting arrangement gradually turned into a source of pleasure and even comfort. The closeness fostered a sense of community and teamwork. I found myself looking forward to hearing about my coworkers' lives and sharing the details of my own life. I have spent time with teachers' families, attended their weddings; we have drank together and sang together. They willingly

adopted me into their lives so I feel a kinship to them. In fact, I fondly refer to one of my coworkers as dad. I will be returning to America soon. It is sad because it does not feel like I am leaving a job. It feels like I am leaving home. But I take comfort in the fact that I will always be a part of something bigger than myself.

I used to proudly talk about coming from humble beginnings like humbleness was a quality to run away from. However, the Japanese willingly show humility by bowing to each other as a sign of mutual respect. Humbleness can be more than a starting point, it can be a destination. I have bowed thousands of times since moving to Japan. Maybe each bow has been a small step towards that destination.

The JET Programme is about more than teaching English. It is about encouraging students and teachers to see the world differently. We get a close up view of each other's strengths and weaknesses. Everyone can see that foreigners are just people. None of us are icons to be worshiped or giants to be feared. Recently, I visited the Tomihiro Museum again. I came across the same painting and I finally understood the meaning. By becoming smaller than a flower, I have grown so much.

英語

Omara Turner

a party hosted by Ogawa san. There she introduced me to her husband, her two children and their families. It was also at this party that I learned the traditional Japanese way of sitting and where I ate my first Japanese home cooked meal; both of which marked my initiation into Japanese customs and culture and to some degree my initiation into the Ogawa family. The party ended with me being informed of a family trip to Tokushima where I later met Ogawa san's extended family and participated in the Awa Dance Festival with them.

My first summer in Japan was defined by a steady bonding experience with the Ogawas via various family activities, but as the temperatures fell so did my physical strength. Soon I fell ill. The cold weather left me shivering and wishing I was home, in Jamaica, where the temperature hardly fell below twenty five degrees Celsius. On many occasions I have fallen ill while living in Japan, but never was I expected to care for myself during my bouts of illnesses. Ogawa san was and is always there to: drive me to the doctor's office (which is ten minutes away from my house on foot), take my temperature, administer my medicine, make dinner and sometimes

make my bed.

Whether I am ill or healthy Ogawa san is always around. She is not just my landlady and neighbor but also a wonderful mother. She is there when I get home from work, she is there when I need someone to talk to, she is and will always be there...Ogawa san is indeed my *Okaasan!*

She remains a constant presence in my life and a major part of my Japan experience. If it were not for the JET Programme I would never have met Ogawa san and by extension her family, a family that was willing to look beyond the language barrier and foster a deep bond with the first Jamaican they had ever met. This same family has made me feel as if we are biologically related. This very same family also bid me a tearful goodbye when I went home for Christmas vacation and was also anxiously awaiting my return and was there to greet me at the airport with open arms and relieved smiles because I was *home*, safe. My Ogawa family has undoubtedly enriched my experience in Japan.

英語